関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

『天義報』に見られる日本の影響

著者	張 淑?
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論集
巻	8
ページ	93-109
発行年	2018-11-30
その他のタイトル	The Influence of Japanese Elements in Tien Yee News
URL	http://hdl.handle.net/10112/16410

『天義報』に見られる日本の影響

張　淑　婷

The Influence of Japanese Elements in *Tien Yee News*

ZHANG Shuting

Abstract

Tien Yee News (*Natural Justice*) was published in Tokyo, 1907; all of its compilers were Chinese intellectuals who were residing in Japan at that time. It was the first women's magazine to advocate anarchism in modern China. Additionally, until March 1908, *Tien Yee News* published 19 volumes in total, which comprised a series with the largest number of issues among Chinese newspapers and periodicals printed overseas in the late Qing Period. Since *Tien Yee News* advocated both feminism and anarchism, it is an essential reference point for examining the spread of Marxism and the women's rights movement in China.

The overwhelming majority of research concerning *Tien Yee News* has emphasized anarchism, socialism or other revolutionary ideological thought. However, there exist few studies on the connection between *Tien Yee News* and the Japanese Socialist Party. However, there is much scope for studying the extent of Japan's influence on *Tien Yee News* and beyond.

This paper examines the background of the establishment of *Tien Yee News,* the influence it received from the Japanese Socialist Party, the editors who had acquired ideological knowledge in Japan, and who further disseminated that knowledge to their homeland China, following the trajectory of radical intellectual thought from Europe through Japan to China.

Keywords：『天義報』、日本社会党、『大阪平民新聞』、無政府主義

はじめに

日清戦争後、中国は隣国日本について学び始めた。この時期、中国の女性達は閨房を出て初めて留学生として海外で近代の教育を受けることができた。留学中、これらの清末の女性は明治維新によって富国強兵を実現した日本社会における先進的生産力、政治や文明などと接触し、特に西洋の民主自由などの思想から影響を受けた。このように、国家の危機に際して、留日女子学生は男子留学生とともに、革命運動の参加、雑誌と新聞の出版と女子組織の成立などの活動に力を注いだ。

『天義報』はこの時期に東京で出版された中国近代において初めてアナキズムを宣伝する女子新聞であり、また同誌は1911年まで、中国人が海外で出版した女子雑誌と新聞の中で、刊行された巻数が最も多い雑誌である。『天義報』はマルクス主義の中国での発展や中国の近代女権運動の研究の資料として重要であると言える。

『天義報』に関する先行研究は、代表的なのは夏暁虹（2006）「何震的無政府主義「女界革命」論」[1]、劉慧英（2006）「从女權主義到無政府主義―何震的隠現与《天義》的變遷」[2]、劉人鵬（2017）「《天義》的無政府共産主義視野與何震的「女子解放」」[3]、小野川秀美（1964）「劉师培と無政府主義」[4]、吉川栄一（2003）「何震と辛徳秋水」[5] などがある。これらの先行研究は、『天義報』に対してはアナキズム、社会主義思想と女子革命思想の視点から検討するものが多い。しかし、『天義報』を創刊した背景に注目し、編集者が日本の社会党と交流したことにより、同報の内容も日本社会主義の色に染まったこと、あるいは西洋社会主義や女権思想の西学東漸の道筋において、日本が発揮した作用を論じるものはあまり行われなかった。

そこで、本研究は、同雑誌に掲載された内容を考察した上で、中国人編集者達が日本に滞在した際、日本で身につけた知識をどのように活かしたかを分析する。その上で近代社会主義や女子解放思想を彼らがいかにして中国に伝達したかを論ずることで、西学東漸の「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という道筋における日本が果たした役割を追求する。

また、本稿で検討する資料として、『天義報』の19巻に関する原文資料は以下のようである。

1）夏暁虹「何震的無政府主義「女界革命」論」、『中華文史論叢』2006年03期、中華書局出版、2006年９月。

2）劉慧英「从女權主義到無政府主義―何震的隠現与《天義》的變遷」、『中國現代文學研究叢刊』2006年02期、中国現代文学館、2006年。

3）劉人鵬「《天義》的無政府共産主義視野與何震的「女子解放」」、『婦女研究論叢』2017年02期、全國婦聯婦女研究所、2017年。

4）小野川秀美「劉师培と無政府主義」、『京都大學人文科學研究所紀要36』、京都大學人文科學研究所、1964年10月。

5）吉川栄一「何震と辛徳秋水」、『熊本大学文学部論叢文学部論叢』（79（文学篇）：９-27）、2003年３月。

表一　『天義報』の収集状況

巻目	1	2	3	4	5	6	7	8-10	11-12	13-14	15	16-19
目次	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●
全文	✖	✖	○	▲	○	○	○	○	○	✖	○	○

● 上海図書館　▲ 国立国会図書館関西館蔵
○ 中国資料叢書収録　✖ 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局図書館

上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』[6] の第二巻中に関わる注釈から、今まで最も完全に収集される『天義報』の巻数は19巻があり、上海中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局図書館に保存されることがわかる。『中国近代期刊篇目彙録』に第1-10、13-19巻の目録を揃った。また、上海図書館が作った『全国期刊索引』のテータベース、関西大学図書館蔵『中国資料叢書6』[7] と国立国会図書館蔵の資料により、『天義報』の原稿に関する収集状況を表一にまとめた。19巻の目次はすべて見つかったが、第1.2.13-14の原本は中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局図書館に保存され、「✖」をつけるもののみまだ揃っていなかった。2016年、萬仕國と劉禾が『天義報』19巻の原本に基づいて訂正した『天義・衡報』の校訂本を出版し、同本は今まで完全に揃ったものである。本稿では、この版の校訂本と筆者が整理した『天義報』の資料を根拠として研究を行う。

一、『天義報』の出版および背景

2016年以前の『天義報』研究を見ると、劉師培・何震を主編として刊行されたアナキズム雑誌という位置付けがなされていた。しかし、2016年に萬仕國・劉禾が『天義・衡報』を出版し、『天義報』の全体が明らかになると、それまでの意見とは異なる事実が明らかになった。図一『簡章』の記載から見ると、『天義報』は最初、編集者に女子雑誌と位置づけられていたことがわかる。同誌の発起人は陸恢權、張旭、何殷震、周大鴻と徐亞尊の女性[8] 5名である。創刊主旨と命名は「以破壊固有之社會，實行人類之平等為宗旨，于提倡女界革命外兼提倡种族政治經濟諸革命故曰天義」というもので、「女界革命」は主な目標として提唱されている[9]。日本女権

6）『中国近代期刊篇目彙録』（第二巻中）、上海図書館編、1979年、上海人民出版社、2217頁。

7）『中国資料叢書6・中国初期社会主義文献②天義（影印）』、株式会社大安、1966年。

8）陸恢權、名は守民、字は恢權、号靈素、清末小説家陸士諤の妹で、女詩人である。何殷震、原名は何班で、何は男女平等を提唱し、「雙姓論」を作った。苗字に父と母の苗字を両方入れ、「何殷震」と自称する。周大鴻、1907年第10期『復報』、何震が書いた『天義報啓』により、周大鴻は「周怒濤」で表した。劉慧英の『從女權主義到無政府主義——關於何震與天義』（『中国現代文学研究叢刊』、2006年第2期）から、周怒濤は蔡元培の妻、周怒清の実妹で、何震と同じくかつて愛国女校の学生で、在学中に密かに同盟会に加入したことがわかる。張旭と徐亞尊は今までの資料から、未見である。

9）『天義報』の主旨について二つの版本がある。もう一つのは1908年5月重刊の『天義』第一・二号合巻、

運動前駆福田英子が主編を務めた『世界婦人』[10] で、「日本に在留せる清国革命派の青年中、今回「女子復権会」なるものを起こし、雑誌《天義報》を発刊せる者あり」と述べており、『天義報』は「女子復権会」の機関誌と見なされていたことがわかる。しかし、「女子復権会」は実際に暴力を用いて男子中心の女子蔑視する社会からどのように権利を獲得したのかに関する資料は今まで残ってなかったが、小野和子（1978）[11] は「機関誌『天義』を発行して男子に対する復仇を鼓吹することが、其の活動の全て」と「女子復権会」を描写した。

『天義報』の発起人は19巻まで全て五人の女性だと雑誌の毎巻に明白に記録したが、これまでの先行研究を見ると、普遍的に同誌を実際に編集した人は劉師培と何震夫婦だと結論した。劉氏夫婦が1907年初日本に来てから半年間に『天義報』の創刊を促したのは当時の時代背景と関係があるからである。

1904年劉師培は何震と結婚した。同年７月、劉師培は何震を連れて上海を訪れた。何震は蔡元培の上海愛国女学に入学した。彼女は同校の女子教育は「孑民既却《警鐘》編輯之任，則有為愛國女學校校長。其時並不取賢母良妻主義，乃欲造成虚無黨一派之女子。除年幼者，照通例授普通知識外，年長一班，則為將法國革命史，俄國虚無黨主義等，且尤注重化學。然此等教授法，其成效亦未易速就。」[12] という述べており、何震は日本に来る前に、すでに上海愛国女学でフランス革命歴史、ロシアの革命知識を得て、暗殺の虚無党思想に染まっていたことが推測できる。一方、劉師培は1904年上海に滞在する間に、蔡元培の紹介で反清性質の団体である「光復會」に入会し、『俄事警聞』、『警鐘日報』の編集者を勤めた。しかし、1906年、劉は清政府に指名手配され、避難先の安徽省で活動していた排満暗殺団体「黄氏学校」に務めることとなった。その時密かに同盟会の成員を招いて『國粹學報』を創刊し、「民族主義」を提唱していた。1907年初、劉師培が活躍していた反清革命運動は、清政府から迫害を被られてきた。同年２月13日に、すでに渡日した章太炎の招きで、劉師培と何震、何の姻戚汪公權、友人蘇曼殊とともに日本に渡ってきた。劉師培は来日してから、東京同盟会の機関誌『民報』で主筆として、「辨滿人非中國之臣民」・「厲害平等論」・「普告漢人」など、民族主義を唱える革命文章を『民報』で発表した。

一方、同時期に日本でも民主革命運動は盛んだった。明治維新後、日本は近代国家の体制を整えたが、天皇はまだ残った。日本の社会主義者は国家の権利が相変わらず国民には無い考え、天皇の憲政に対抗するように全国的に自由民権運動を展開した。『辛亥革命史稿』[13] の紹介によ

第八巻から第十九巻までに載せた主旨は「破除國界、種界，實行世界主義。抵抗世界一切之強權。顛覆一切現近之人治。實行共產制度。實行男女絶對之平等。」というものである。

10）「内外時事・女子復権会」、『世界婦人・労働運動史研究会編集 ── 別冊１』第13号、明治文献資料刊行会、1961年。

11）小野和子『中国女性史』、平凡社、1978年、95頁。

12）蔡元培『蔡孑民先生言行錄』、廣西師範大學出版社、2005年。

13）『辛亥革命史稿』第１集、上海人民出版社、1980年、243頁。

ると、1906年、社会民主党は社会党を成立した。しかし、社会党内部には、意見の分裂で二つの派に分けられた。六月、片山潜、田添鉄二を代表とする派は、普通選挙権と議会を獲得する手段によって革命目標を実現すると主張し、「社会主義会」を組織した。幸徳秋水、堺利彦、山川均と大杉栄を代表とする派は無政府主義思想を宣伝し、ストライキや暗殺活動で革命を実現すると提唱し、「社会主義金曜講演会」を組織した。日本社会党に「温和派」と「強硬派」の論争の中で、何震と劉師培は「強硬派」に傾斜した。日本社会党が分裂する前に、劉氏夫婦は幸徳秋水らに偏った意向を抱いた。吉川栄一氏によれば、同年四月頃、章炳麟、劉師培と何震三人は張繼の案内で、初めて幸徳秋水を訪ねた[14]。張繼は当時、劉師培と同じく『民報』の編集者で、早くから無政府主義を信奉する者で、「幸徳秋水・大杉栄・堺利彦らとの交際するようになり、とりわけ秋水の學問に佩服した」[15] と述べている。劉氏夫婦は今回の面会に対してどのような印象が残っていたのかは史料ではっきり記載していなかったが、この後、社会党「強硬派」の支持で張繼・劉師培・章炳麟らは「社会主義講習会」を創立し、『天義報』に日本社会党人らの投稿が大量に載せられることにより、両者が革命事業に合意を求めた様子が伺えるだろう。

また、三月、東京にある中国同盟会に「倒孫運動」の影響で、劉師培らは孫中山が会党の力で革命を求める方法に疑いを持ち始めた。ついに、1907年６月、日本に来て５ヶ月、劉氏夫婦は『民報』を離れ、『天義報』を創刊した。

二、日本社会党の影響

１、『天義報』の出版まで中国におけるアナキズムの伝播

中国でアナキズムの伝播は輸入、受容、形成、成熟、衰退と消失の段階を経て、清末民初にわたっておよそ40年に跨った。アナキズムが初めて中国に紹介されたのは19世紀末の頃である。当時アナキズムの紹介は新聞や雑誌でロシアニヒリストの暴動や暗殺などの活動を報道することに留まっていた。例えば、アメリカ宣教師 Young John Allen（林樂知）が主編した『萬國公報』の、569巻「俄皇被刺續聞」、581巻「尼黨逆書」、641巻「凶犯處決」「亂黨漸滅」などの記事で、ニヒリストを紹介した。そのほか、『西國近事彙編』で、より多く当時各国の社会党と無政府党の活動を言及し、1894年『續編』第24巻で、初めて「Anarchism」を「阿那基斯忒黨」と訳した[16]。1894年の『泰西各國采風記』に「Anarchism」を「鴨挪吉思」と訳し、1895年の『泰西新史攬要』で「Anarchist」を「鴨捺雞撕得」と訳した[17]。

14）吉川栄一「何震と幸徳秋水」（『熊本大学文学部論叢』Vol.9）、2003年、17頁。

15）張繼『張溥泉先生全集・第四編雑著』中央文物供應、1951年、97頁。

16）蔣俊・李興盛『中國近代的無政府主義思潮』、山東人民出版社、1990年、18-19頁。

17）曹世鉉『清末民初無政府派的文化思想』、社會科學文獻出版社、2003年、27頁。原文引用：劉其發『近代中國空想社會主義史論』、華夏出版社、1986年、78頁。

この時期にアナキスト党とアナキズムの紹介はヨーロッパへ視察に行った大臣の記録に現れたこともあり、例えば、上記の『泰西各國采風記』である。しかし、この時期の中国人はアナキズムの概念をはっきり理解しておらず、作者宋育仁の政治立場により、「亂黨」「叛黨」と称される場合が多かった。

中国人で最も早く「無政府」という言葉を使用したのは当時日本で流亡している梁啓超である[18]。彼は1900年『清議報』の第66冊に「無政府黨之凶暴」で次のように述べている。「意大利前皇已為無政府黨人所弑……聞此種黨人行為。尚不止此。美國現總統麥堅尼氏。黨人亦欲暗害之。各地新聞皆傳此事。幾釀成大擾亂云。」[19] と書き、アナキストがイタリア皇帝を暗殺したことを報道した。また、1903年『新民叢報』の「論俄羅斯虚無黨」で、国内に虚無党を紹介した際に「彼黨之宗旨，以無政府為究竟」と述べ[20]、「無政府党」と「虚無党」の概念は明確的に区別していなかった。

このように、19世紀末から中国国内で最初にアナキズムの書籍を翻訳する1902年まで、中国でAnarchism[21] の紹介は新聞記事の報道に留まったが、1902年に馬君武が「獨立之個人」の筆名でイギリスThomas Kirkupの*A History of Socialism*を『俄羅斯大風潮』に訳したことから1907年『天義報』の出版までの間はAnarchismの中国への輸入段階と言われる。1902年2月、当時中国で社会主義においてかなりの影響力がある訳本、日本人社会主義者幸徳秋水の『広長舌』の中国語版『長廣舌』が出版された。同本は社会主義の宣伝と資本主義の反駁を中心とし、特に彼の『無政府之製造』にある「暗殺は腐敗社会の必然なる産物で、アナキズムの盛行は群衆が国家に対して絶望を感じた産物だ」[22] という話は早期の中国革命派に引用された。上記の二つの訳本の出版はロシアニヒリストからアナキズムに導くための世論の根拠を提供した。

1903年、「蘇報案」事件の前後、1902-1906年の時期にアナキズム宣伝のピークを迎えた。この中で、最も影響力があるのは煙山専太郎の『近世無政府主義』である。同書にはロシアニヒリストの歴史を詳細に叙述し、当時の在日留学生の中で広く回覧され、新聞にも豊富な取材を

18）同15、27頁。

19）『清議報・四』、『中國近代期刊彙刊』、中華書局、1970年、4202頁。

20）楊哲「"虚無黨"話語在中國：從傳入到傳播」、『現代哲学』、2016年第6期、49頁。原文引用：梁啓超『論俄羅斯虚無黨』、『新民叢報』、1903年、40、41合刊。

21）「無政府主義」と「アナキズム」について、井伸介は『日本学界対中国無政府主義之評介』に、「無政府主義」という訳語は最初に日本人が創出されたものだが、現在の日本学界ではこの意訳よりカタカナで表示される英語の音訳、アナキズムの方がより多く使用されている。日本の学者達は「無政府主義」が「Anarchism」の意味を明白的に洗練しかねると指摘した。そして、中国の無政府主義に関する研究では直接「無政府主義」の使用を避け、「アナキズム」にする場合が普遍である。例えば、日本における無政府主義研究の大家、嵯峨隆の『近代中国アナキズムの研究』、坂井洋介の『中国アナキズムの影』、『近年の中国のアナキズムの研究をめぐって――概況と展望――』、また嵯峨隆と坂井洋介が共編した『原典中国アナキズム史料集成』などである。

22）小田切進編『明治社会主義文学集――長広舌／幸徳秋水』、筑摩書房、1965年。

提供した。楊哲（2016）[23] から、煙山専太郎の『近世無政府主義』はかつて意訳、節訳、編訳により中国に紹介されたのはせめて少なくとも11回があることが分かった。たとえば、『大陸』の「俄國虚無黨三傑傳」「弑俄帝亞歴山大者傳」、『浙江潮』の「俄國革命黨女傑沙勃羅克傳」、『警鐘日報』の「俄國虚無黨源流考」で、金一の『自由血』、と張継の『無政府主義』は『近世無政府主義』の全訳本を踏まえ、一層詳細な内容を含んで書いたものである。

上述したように、19世紀末頃の中国の新聞や雑誌でニヒリストやアナキストに関するまばらの報道や、日本のロシアニヒリスト党に関する著作に影響を受けたが、アナキズムの中国での伝播はまだ不健全であると言える。まず、アナキズムの宣伝者は厳格なアナキストではなく、自らの政治的抱負を実現するために、アナキズムに有利な部分を選択して宣伝した。たとえば、排満の為に暗殺や破壊の旗を高揚しており、アナキズムを手段と、民主主義を実現する方法とみなした。また、アナキズムとニヒリストの概念を混同し、区別しない場合が多かった。中国がアナキズムを組織的に発展させていくのは1907年に『天義報』（東京）と『新世紀』（パリ）が出版されたことである。パリで直接西欧のアナキズム思潮から影響を受けて出版した『新世紀』と異なり、日本で出版した『天義報』は、西欧に湧いてきた思潮を日本の社会党人が解釈した上で、改めて吸収したものであるため、特殊性があると考えてよい。

2、アナキズム学説の科学的解釈

さて、1902-1906年のアナキズム宣伝とは異なり、『天義報』が中国人に初めてアナキズムを科学的に紹介するという画期的な位置づけとなったのはなぜだろうか。

まず、以前の報道や記事で単純なアナキズム運動や事件、あるいはアナキズムの起源を避けて一方的なアナキズムを紹介したこととは異なり、『天義報』でのアナキズムの紹介は西欧のアナキズムにおける系譜があると認識しながら、アナキズム学説を系統的に説明した。

例えば、「歐洲無政府党宗旨彙錄」で、作者公權はプルトン、バクーニンと「們斯禿」の無政府主義の学説を区別して紹介した。しかも、文末でバクーニンの無政府主義を「無色無形支主義」、フランスの「們斯禿」の無政府主義を「社会的無政府主義」と評価した。また、「破壊社會論」で、「今日之世界，虎狼之世界也。虎狼食人于有形，人类相食于無形」となるのは「試推其原因，則以社會成立以来，自古迄今，無一日而非階級社會，故人類亦日居階級社會中，不能自脱。今欲破階級，非擧固有社會盡扫蕩之不為功。蔽以一言，即破壊社會是也」と書き、「破壊社會」を達成するために、天下の君主、資本家、婦女を抑圧する男子を消滅させ、宗教、法律などを消し去るする十一条の方法を考えた。これはバクーニンが主唱した「破壊主義」、すなわち国家の破壊による新社会の創造を目指し、民衆や特に農民の力に頼ってブルジョア国家制度の基礎になる議会・役所・軍隊・銀行・教会などを破壊するというバクーニン学説の特色を述

23）同20、49頁。

べたものである。そのほか、「廃兵廃財論」、「巴枯寧学術要旨」でも詳細かつ直接的ににバクーニンの無政府主義的観点を紹介するほか、作者の見解を加えて論述する形で紹介した。

プルトン、バクーニンの学説を紹介することより、『天義報』ではクロポトキン学説を相当な文字量で紹介している。なので、「天義派」アナキストらは他の無政府主義学説と比べ、クロポトキンの学説により傾倒したと言えよう。例えば、「苦魯巴特金之特色」では、「苦魯巴特金之無政府主義，其特色之處，在於與科學之點相近……布魯東與巴枯寧之學術，憑議論以為獨斷者也。故苦魯巴特金鑑於僅用演繹倫理者之謬誤，復證於事實而求歸納之法。如彼以互相扶助為反清，必先證之動物界，以求其公例，故研究動物皆生活之狀態，蒐集其事實，以明感情為動物界所普具……」とクロポトキン学説の科学性を高く評価し、続いて社会財産配合[24]について、クロポトキンの共産主義をプルトンの集産主義、シュティルナーの個人主義と区別して説明した。劉師培の「苦魯巴特金無政府主義述畧」で、「苦魯巴特金之學說，禹共產無政府主義最為圓滿……」と書き、且つ第十一巻から十四巻まで、14ページの文字でクロポトキンの学術要旨、「互相扶助說、無中心說、生理および法律、財産に関する論述」などを詳細に紹介した。文末に「故無政府之後，惟苦氏自由集合之說最為適宜」と現況を結び、クロポトキン無政府主義の可実行性を肯定した。「麵包掠奪」・「快愉之勞動」・「未来社会生産制方法及手段」などはクロポトキンの著作を中国語で訳したものである。

また、『天義報』では西欧無政府主義の系譜を分析したのみならず、当時の世論における無政府主義をロシアの虚無主義・西欧の社会主義・孫中山の三民主義と混同されたことに対して、是正する文章を発表した。例えば、「論俄國革命與虛無主義之別」[25]では、次のように述べ、「虛無黨人 Nihilist 一語，正譯當作“虛無論者”，始見於都介涅夫名著《父與子》中，遂後通行。論者用為自號，而政府則以統指畔人。歐亞之人，習聞訛言，亦遂信俄國擾亂，悉虛無黨所為，致混虛無主義於恐怖手段 terrorism，此大誤也……由是觀之，則虛無主義本不足該俄國革命。謂革命黨有虛無論者可，若合二者而一之，惑矣」、このように、ロシア革命を虚無主義と誤って放棄され、さらに暗殺暴動を唱える虚無党を無政府党と同列に論じるのは愚かな限りだと指摘した。

「歐洲社會主義與無政府主義異同考」[26]では、著者の劉師培は社会主義と無政府主義の相違点を明らかにした。劉は「社會主義多與無政府主義相表裡」と考え、無政府の学術は個人的無政

24）「均主廢資本似有制度，以為社會全體之人所有，然其意又有不同……（一）凡物不得指明為何人之所有。（布魯東）；（二）凡物皆為我有。（斯撤奈爾）；（三）凡物為眾人之所有。（苦魯巴特金）。布魯東之見，謂一切財物，不必指明其歸於何人，惟集此而置之。當使用之時，不論何人，均得遂其自由適當之使用。斯撤奈爾之見，則謂物皆我有，我無私心，故個人均得自由使用。苦魯巴特金之見，則謂物為眾人之物，故眾人之使用，均當共同一致。此即集產主義、個人主義與共產主義之區別也。」、「苦魯巴特金之特色」、公權、『天義』第3巻。萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、388、389頁。

25）獨應「論俄國革命與虛無主義之別」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、188-192頁。

26）申叔「歐洲社會主義與無政府主義異同考」、『天義』第六巻。萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、243-246頁。

府と社会的無政府の二つに分けられると主張した。個人の道徳、修養の発達により改革を促す、哲学的無政府主義とも言え、もちろん社会主義とは大きな違いがある。それに対して、プルトン・バクーニン・クロポトキンはそれぞれ集産・破壊・共産の無政府主義に属するが、社会経済の変革により無政府の社会に達する手段が同じであるので、合群的無政府主義と言う。クロポトキンが主張する共産的無政府主義は社会主義とは同一で、「国家」の設立が必要かどうかについて一致しない。クロポトキンの話で、「共產之制，果能實行，則政府不必存，國家不必設」と述べるため、政府が設立されると、統治権を握る階級と、分配する機関もそれに従って生まれ、そうすると社会主義の原則である「平等」に背く。これに、社会主義の拡張に従い、無政府主義の境界に達するべきであり、「而共產的無政府主義，實由社會主義而生，乃社會主義之極端，不得別至於社會主義之外也」、社会主義を信ずる際に無政府主義を排斥するべきではないと劉師培が強調した。

「論種族革命與無政府革命之得失」と「《總同盟罷工》序」で、『天義報』同人達は満族政権を打倒する手段は種族革命から生じるもので、種族革命の提唱者は漢族が満族に圧迫されたたこと、又は満漢民族の不平等によって中国が外国に侵略される現状を招いたと考えている。種族革命が根本的に漢民族の思想であり、排満の結果は悲惨な戦争となった。最終的に、満族の統治を打倒し、漢族の政権が設立されたものの、搾取と圧迫は相変わらず残された。そこで人類の不平等はまだ解決されないと唱え、ひいては中国に古くから無政府主義の伝統があるため、他国より無政府革命が成功させやすく、列強に侵略される現状を解決するには無政府革命しか中国を救われないと劉師培らは主張した。

近代東西接触の研究を省みると、日本はいつも中国人が西方の新物事を認識している過程で仲介の役を演じることである。『天義報』の出版も例外ではないだろう。前述したように、『天義報』の出版する背景を紹介する際に、日本社会党の内部で「温和派」と「強硬派」に分けられ、劉氏夫婦は幸徳秋水、堺利彦、山川均を代表する直接行動派に傾斜し、彼らの影響で劉師培は来日の半年間に排満主義者から無政府主義者に変化した。且つ日本社会党は『天義報』の創刊および「天義派」アナキズムの形成に欠かすことできない役割を果たした。筆者は原文を調査している際に、『天義報』に載せた無政府主義に関する大量の投稿は日本人が書いたものを基づいて中国語に翻訳したものであることがわかった。それらの翻訳は以下の表二にまとめた。

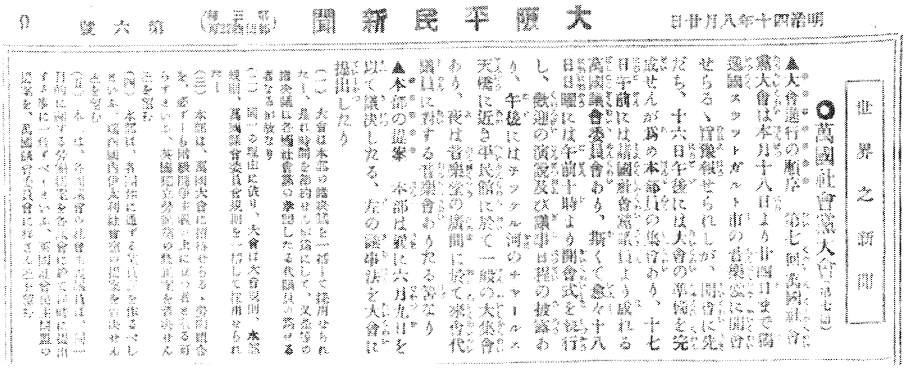
表二　『天義報』における翻訳の文章

	タイトル
第一卷	《百北爾總同盟罷工提議案》（譯日人《社會主義研究》第五册）、 《巴枯寧學術要旨》（節譯日人《獨立評議》第五册）、 《嗚呼勞動者》（譯幸德秋水《平民主義》）、《擊石火節譯》（譯幸德秋水《平民主義》）
第二卷	《社會革命大風潮》、《俄國女傑路易斯傳》（日人志津野又郎《革命婦人》） 《俄國女傑罵閣臣語》（節譯《新時代報》）、《日本勞動歌譯意》（日本《大火鞭報》）
第三卷	《苦魯巴特金之特色》（摘譯日本久津见蕨村《無政府主義》） 《婦人與政治》（譯日本幸德秋水《平民主義》）
第四卷	《同盟罷工》（英）海哥美爾、《歐洲無政府党宗旨彙錄》、《露國革命之祖母婆利簫斯楷傳》（節譯幸德秋水《露國革命之祖母》及志津野次郎《革命婦人》）
第五卷	《節譯俄杜爾斯德答日本報知新聞社書》
第六卷	《萬國社會黨大事記》
第七卷	《萬國無政府黨大會記畧》、《萬國社會主義婦人會議記畧》、 《伊大利社會黨分裂記》、《婦女選舉權問題》
第八九十卷	《斯撒納爾無政府主義述畧》、《萬國社會黨大會續記》、《萬國無政府黨大會決議案記》、 《記女界與萬國社會黨大會之關係》、《俄國女傑遺事彙譯》、《＜總同盟罷工論＞序》
第十一十二卷	《苦魯巴特金無政府主義述畧》、《俄杜爾斯托＜致支那人書＞節譯》、 《無政府黨大會後事實彙記》、《萬國革命運動記》、《萬國女界運動記》
第十三十四卷	《快愉之勞動》、《記美國擬放逐哥爾多曼女史》、《記浦鹽斯德俄女子加入革命運動事》、 《記英國婦人社會黨本部》、《彙記萬國革命風潮》、《社會主義與國會政策》
第十五卷	《共產黨宣言》（The communist Manifesto）序言（德）因格尔斯著，民鳴譯、 《未来社会生產制方法及手段》（俄）苦魯巴金著，申叔譯
第十六-十九卷	《＜共產黨宣言＞序》、《共產黨宣言》（The Manifesto of the Communist Party）馬尔克斯，因格尔斯合著，民鳴譯、《社会主义經濟論》（首章）（英）哈因禿曼著，齊民社譯、《面包畧奪》苦魯巴金著，申叔譯、《無政府主義之哲理同理想》苦魯巴金著，齊民社同人譯、《俄國革命之旨趣》杜尔斯德著、《致中国人書》杜尔斯德著，忱芻譯、《俄國第二議會提議之土地本法案及施行法案》怪漢譯、《無政府黨第四次大会決議》公权譯、《無政府共產主義之工人問答》馬拉叠斯丹著、《貧民唱歌集》（波蘭石門華作，申叔譯《希望詩二章》、秋雞哈威作，張繼譯《詠同盟罷工》）

このように、『天義報』で西方無政府主義学説を紹介する際に、直接西方著作を翻訳することより、日本人が訳したものを底本にして中国語に訳すのは大体である。これら日本語版の学説理論は当時在日「天義派」アナキストがアナキズムを接触する際に便宜を与えられるのみならず、「天義派」アナキストのアナキズム理解にも日本的色彩が見られるようになった原因である。

3、『大阪平民新聞』との伝承関係

『天義報』に引用や翻訳される部分は出典を注記した。例えば、「巴枯寧學術要旨」「婦人與政治」などである。しかし、「萬國無政府黨大會」・「伊大利社會黨分裂記」・「萬國社会主義婦人會」などの報道は本当に『天義報』の編集者は現場に行って記録したものであるのかという疑問が残る。色々な資料の調査によって、『大阪平民新聞』を参考にしたのではないかと考える。



明治四十年八月廿日　大阪平民新聞（第六號）

世界之新聞

○萬國社會黨大會（第七回）

▲大會進行の順序　第七回萬國社會黨大會は本月十八日より廿四日まで獨逸スツットガルト市の音樂堂に開會せらるゝ豫定なりしが、開會に先だち、十六日午後には大會の準備を完成せんが爲め本部員の集會あり、十七日午前には萬國社會黨員より成れる萬國議會委員會あり、斯くて愈々十八日曙には午前十時より開會式を挙行し、歓迎の演說及び議事日程の披露あり、午後にはチツクル河のチヤールス天橋に近き平民館に於て一般の大集會あり、後は音樂堂の廣間に於て來會代議員に對する音樂會ありたる筈なり

▲本部の提案　本部は既に六月九日を以て議決しかる、左の議事法を大會に提出したり

（一）大會は本部の議決案を一部として採用せられたし、其理由を詳せば、第一に、又本部の議案は各國社會黨の承認したる代議員に對する書なるが故なり、第二に、大會は大會規則、本部規則、萬國議會委員規則を一括して採用せられたし

（二）本部は、萬國大會に提出せらるゝ、各國團體の議案を、必ずしも議場に於て、又は書面にて、ならずして、英國社會黨の機關紙を通じて、公表せんことを望む

（三）本部は、各國に通ずる委員の一人を指名したしとの本部は、各國團體の社會主義者は、第一月曜に開催する各種集會を、各國會に於て、同時に提出する事に、行なわるべきこと、英國社會黨主唱の提案を、萬國議會委員及大會に、提出せらるる筈なり

図一　『大阪平民新聞』第６號　『萬國社會黨大會』（第六回）

『大阪平民新聞』は明治40年６月から明治41年５月[27]まで大阪に出版した隔週誌である。『天義報』の発行期間はちょうど明治40年６月から明治41年３月の間であり重なる。『大阪平民新聞』の発行兼編集人は森近運平であり、同誌は幸徳秋水、堺利彦を代表とする日本社会主義強硬派が、温和派の輿論を宣伝する東京の『社会新聞』と対抗して無政府主義的直接行動を宣伝するために観光したと考えてよい。

『天義報』と『大阪平民新聞』を比較することにより、『天義報』における「時評欄」や「記事欄」などの投稿はほとんど『大阪平民新聞』と重なる。また、『大阪平民新聞』に基づいて書いたと推測できる。加えて、『大阪平民新聞』の記事が先に出て、『天義報』の報道は折りよく少し時間をずれてそれを訳して出版することがわかった。例えば、図二の記事は1907年８月20日に出た。それに対して、『天義報』は９月１日第六巻に『萬國社會黨大事紀』を発表し、かつ其の内容は『大阪平民新聞』の記事をそのまま訳したものである。表二で、『天義報』における万国社会党大会、万国社会主義婦人会議、万国無政府党大会、各国家で無政府運動の動態、などの時事は『大阪平民新聞』でその根拠が見つけられる。それだけではなく、『大阪平民新聞』に幸徳秋水が執筆した記事である『水潺湲』（1907年七月十五日、第４号）、『東西南北――何震女史より』（1907年九月五日、第７号）、『新刊紹介』（1907年九月二十日、第８号）などの文面の中で、『天義報』を日本人読者に紹介した。また、『大阪平民新聞』に多く報道された「總同盟罷工」・「非軍備主義」などの記事は『天義報』、その後続誌である『衡報』に載せられた。また、『大阪平民新聞』には、幸徳秋水・山川均・堺利彦らからクロポトキンの著作を大量に翻訳し、クロポトキンの共産的無政府主義を肯定し追随する意向が見られる。これによって「天義派」のアナキストがクロポトキンの互助論、共産主義に偏ったと見ることができるだろう。つまり、日本の社会党機関誌は『天義報』が世界中の社会党・無政府党などの革命動態に接触し

27）明治41年11月第11号に『日本平民新聞』に改題した。

ているうちに最も重要な仲介となり、『大阪平民新聞』での無政府主義は直接「天義派」アナキズムの形成に影響したと言えても過言ではないだろう。

4、「社会主義講習会」と「社会主義金曜講演会」

『大阪平民新聞』と『天義報』の関係は今までの研究であまり論じられなかった。しかし、『天義報』から、「天義派」の主張を宣伝する機関である「社会主義講習会」と日本社会党強硬派の「社会主義金曜講演会」は緊密な連携があることは多くの研究で言及される。

1907年9月第六巻の『社会主義講習会第一次開会記事』では、作者公權は「本年六月劉君光漢、張君繼因中國人民僅知民族主義，不計民生之疾苦，不求根本之革命，乃創設社會主義講習會，以討論此旨……劉君光漢布告開會之宗旨……不僅以實行社會主義為止，乃以無政府為目的者也……次由張君繼報告……詮明無政府主義……今日開會後，擬每星期中舉行講習會一次……一為無政府主義及社會主義學術，一為無政府黨歴史，一為中國民生問題，一為社會學。由中外各國績學家講演……」[28] と社会主義講習会の目的を紹介した。「社会主義講習会」の集会は合計で15回があり、九回目からの開会記録は『衡報』[29] に細かく記述されている。表三に、『天義報』に載せられた八回の期日と講習者をまとめる。

表三　八回目まで「社会主義講習会」の例会

社会主義講習会	日付	講演者
第一回開会	1907.08.31	劉師培、張継、幸徳秋水、何震
第二回開会	1907.09.15	劉師培、堺利彦、張継
第三回開会	1907.09.22	劉師培、張継、章太炎、潘怪漢、景定成、湯増壁
第四回開会	1907.10.06	山川均、劉師培、張継、景定成
第五回開会	1907.11 二週目	劉師培、張継、大杉栄
第六回開会	1907.11 四週目	劉師培、張継、大杉栄、喬宜齋
第七回開会	1907.12 二週目	汪公權、山川均、張繼
第八回開会	1907.12 四週目	張繼、大杉榮、潘怪漢、李君、汪公權

劉師培が言及した「外国績學家」は、表三によると日本の社会党人を指すことがわかる。かつ、全員「日本社会主義金曜講演会」の会員、又は日本社会党「強硬派」の党員である。直接行動派の社会党人らは公開して講演する形式で当時留日の中国人に無政府主義を宣伝した。例

28）萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、307-311頁。

29）『衡報』に載せた記事によると、日本社会党人は9回目からの毎回社会主義講習会の開会は漏れなく出席した。たとえば、宮山崎民蔵の「社会主義と無政府主義の区別」、坂本清馬の「暗殺主義」、守田有秋の「労働組合および無政府主義」などの演説が行われた。当時清国の留日学生に、無政府主義などの理論を伝播した。

えば、幸徳秋水は無政府主義の起源および無政府主義と社会主義の区別を紹介した。堺利彦は第二回集会で人類社会の変遷に遡り、早くとも野蛮時代に共有の財産分配の制度が存在し、文明時代に入ると財産私有制、社会階級により貧富差別と圧迫搾取が生じられるから、「上古の共産之制」を復興すべきだと演説した。そのほか、山川均は無政府主義の互助主義、大杉栄はバクーニンの「聯邦主義」などを分析した。これらの演説は「天義派」アナキスト同人に崇拝されたとともに、中国留日学生の中でも反響を引いた、来場人数は第二回の開会で100人超えた。

総じて言えば、中国社会党より一歩早く成長した日本の社会党は、「天義派」アナキストが最新の無政府主義学説や世界の革命時事を把握することの便宜を与え、日本社会党の強硬派のアナキズムは直接中国最初の無政府主義者を誕生させ、後に無政府主義や社会主義の中国での発展を促した。

三、『天義報』に見られる西学東漸の道筋

ところが、「天義派」アナキストは日本社会党人の無政府主義の学説を全面的に受け入れてなかった。彼らは中国の現況を踏まえて自分の経歴と結び、「天義派」なりのアナキズム主張を考え出した。

1、唯一女性革命も宣伝する無政府主義雑誌

まず、最初の無政府主義を宣伝する刊行物であるのみならず、同時期に見られる無政府主義刊行物（例えば『新世紀』）と比べ、唯一女性解放も高揚するものである。あるいは、『天義報』は出発点において「女子復権会」の機関誌と位置づけられ、女性解放の提唱を目指すが、同時期の女性新聞や雑誌と比べると、唯一無政府主義性質も持つ刊行物だと言えよう。『天義報』は二つの性質があるが、両者は相互に矛盾するとは言えないし、むしろ補い合うところがある。両者の共存は『天義報』のアナキズムの特色だと思われる。

重なる性質である『天義報』に対して、「水潺湲」で、「支那の婦人何震氏等、近日雑誌『天義報』を発行す、男女同権の説を主張し、且つ政治的社会的革命を鼓吹するの処、単に満州排斥を事とする革命党青年と頗る其選を異にす、支那婦人の前途決して侮る可からざる也。何女史一日書を寄せて曰く、「貴国の女界素と文明と称す、なんぞ男女平等の思想、必ず男子に頼て之が提倡を為すや」云々と、嗚呼、僕之に對して何をか答ふべき、借問す文明の教育ある日本婦人諸君亦此語に對して果して何をか答へんとするや」[30] と幸徳秋水が述べ、彼は何震が排満革命を目指すのみならず、政治的社会的革命を目指す無政府革命の志向を高く評価し、彼女が唱えた男女平等の決意に対して十分に敬服し、かえって日本の女性たちが政治への無抱負を反省

30）幸徳秋水「水潺湲」、『大阪平民新聞・第四號』、1907年７月。『明治社会主義資料集・第五集』、労働運動史研究会編、59頁。

すると汗顔のいたりだと感じた。また、日本政府に手配され、ヨーロッパに逃亡した張繼は齊民社への連絡で、「《天義》總須接續出版，因東方吾黨之機關，除日人所刊《平民新聞》外，唯有此報。惟須將“女子復仇”諸語稍加改變，當以自由戀愛為最確當。且西方革命黨捨英國外，亦鮮有分男女之界者，惟以社會革命為主而已」[31] と、無政府主義の発祥地である西欧でも、『天義報』のように無政府主義を宣伝する際に「女界革命」を単独で変革の目標として主張するのは稀であったと伝えたのである。

『天義報』の後期に、論旨の変化から、同誌における宣伝の重心は「女性解放」「社会主義講習会」の活動および無政府主義の伝播から移したことがわかる。しかし、天義派が「女界革命」を唱えた際に無政府主義を方法論として使用するので、他の女子解放を宣伝する雑誌や新聞などと区別することができる。最も代表的なのは、『女子宣布書』・『女子復仇輪』・『論女子勞動問題』・『女子解放問題』などである。この主張は『女學報』・『中國女報』・『中國新女界雑誌』など、当時の女子新聞や雑誌でよく「女学と国家」を強調し、すなわち「興女学」により一定な知識素養を女性に身に付けさせることにより、さらに子孫の育成に役に立つ。また、人口の半分を占める女性は国民の意識を覚悟させ、民族危機に瀕している際に男性とともに救国するというものである。これに対して、「天義派」アナキストらは、女性を「女子国民」に育てる一般的な主張は、実際に男子が独自で家計を負担する責任を避け、女子教育により女子の独立を目標するのは「名曰助女子以獨立，導女子以文明，然與女子以解放之名，而使女子日趨於勞苦」[32] という陰謀だと考え、この故に、昔の男尊女卑は、実際は「男苦女楽」だが、現在女性は男性に利用され、元々男性の苦痛を分担し、女子の快楽を減らすことになると何震が述べ、女子解放を実現するために、根本的に必要なのは「盡覆人治，迫男子盡去其特權，退與女平，使世界無受制之女，亦無受制之男」という方法であるとした。獨應は「婦女選舉權」の文末に以下のように注釈した。女性参政という議題に対して、参政権を獲得する以上は、政府や国家の存在を認めるから、天義派アナキストはもちろん反対の意見を抱く。

「論女子勞動問題」[33] で、現在中国で苦しみに陥っている女子に、娼妓、妾御、婢僕雇婢及び工女の4種類があるが、これら女子は生計問題に困窮され、ひいて低下の地位に扱われる。其の原因を究めて、財産は不均衡的に分配されるからである。この不平等は排除するために、作者は富民と資本家を抹殺し、貧富の差をなくし、協賛を行なって男女の差を無くさなくてはならないと考え、それに資本家を非難するとともに、女子の労働を否定、共産主義社会の実現を訴えた。また、封建社会の女性と比べ、資本主義制度での女性はより不幸福で、資産工場女工の出現は資本家は女性を利用し労働力になさせるからで中国女性の幸福のために、中国では資産主義を発展させないように提言した。数千年来の世界、階級制度の世界であった。今其の弊

31)「張繼君由倫敦來函」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、753-758頁。
32)「女子解放問題」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、138頁。
33)「論女子勞動問題」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、108-120頁。

害を除こうとするなら、人治を廃絶して人類の平等を実現し、世界を男女共有の世界に変えなくてはならない。

2、中国古典との融合

また、「天義派」アナキストは女性革命と無政府理論を結んで自らの主張を唱えた当時、西方の無政府主義主張を巧みに中国の古代の学説と繋げ、無政府主義の正当性を主張した。これは「天義派」無政府主義の二つ目の特色で、中国無政府主義と中国古代思想の融合ということである。劉師培は国学大家として、『天義報』は無政府主義思想を当時の人々に受け入れさせるように、中国伝統学説、古代政治から無政府主義思想を解釈し、当時中国の国情に対して無政府主義の合理性を説明し、ひいては中国で無政府革命の正しさを述べた。例えば、第5巻に《中国無政府主義發明家老子像》の図像が載せられ、編集者は中国は古くから西暦紀元前6世紀、道家思想に無政府主義なる思想のひな形が現れたと思う。「李卓吾先生學說」[34] で、「西歐有巴枯寧，中國亦有巴枯寧。中國之巴枯寧，且生於西歐巴庫寧數百載前。其人惟何？即明溫陵李卓吾先生是也」と作者不公仇が述べ、李卓吾が首唱した学説は、「一曰不為他人所束縛，二曰破盡古今之是非」であり、その「破盡」の対象は男女の限界を排除することは含まれ、彼の「觀音問」に初めて女子は男子と等しく教育を受ける必要性を説いた。また、「唐鑄萬先生學說」[35] で「…中國自古迄今，惑於三綱之邪說，君制其臣，父制其子，夫制其妻，以空理殺人，蓋較酷吏為尤毒…甄字鑄萬，喜陸王之學，曾仕清為山西縣令…乃作為《潛書》內外篇，計十數餘萬言，均以警世濟民為主。其最精之說有二：一曰斥君主制專制，二曰嫉男權之日昌。…唐氏斥男權之詞，析為四端。吾女界觀之，當之男女平權之說，不始于西人，而尊男之風庶幾可以稍革矣。…」と、作者は男女の不平等を初めて批判するのは西方から始まるとはいえないと考え、清の唐鑄萬の著作『潛書』に夫婦の平等、子女の平等、夫婦両家族の平等および兄妹の平等などの学説から男女平等という意識の覚醒が見えられるとした。作者は明清の際に唐鑄萬さえ男女平等を悟ったことに反省し、現在の人々がまだ男子の身分が高いに執着するのは恥すべきことであると結論した。「西漢社會主義學發達考」[36] で、漢代の「限制民田」「屈抑富民」の政策は貧富を均等する手段だと肯定した。しかし、王莽の政権を設立する際に、「假限制富民之名，壟斷天下之利源以便其專制……是則土地，財產國有之說，名曰均財，實則易為政府所利用」と政府の偽善を暴き、「則今之預設政府，又以“平均地權”愚民者」と作者は孫中山の種族革命の偽善を批判した。また「鮑生學術發微」[37] で、魏晋の鮑生が唱えた君主の排除、「廢滅人治」のものは無政府の説と合致すると主張した。

34）「李卓吾先生學說」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、221-226頁。
35）「唐鑄萬先生學說」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、226-230頁。
36）「西漢社會主義學發達考」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、231-243頁。
37）「鮑生學術發微」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、249-253頁。

3、自由無政府主義より平等な無政府主義の提唱

「天義派」アナキストは中国の古典から無政府主義が中国での合理性を論述するのみならず、西欧の無政府主義学説の知識を備え、日本社会党が崇拝した共産的無政府主義を受け入れ、しかも追随する傾向がある当時に、「天義派」なりの観点を主張した。それは自由より平等な無政府主義を提唱することである。「無政府主義之平等観」では「現今倡無政府説者，一為個人無政府主義，一為共産無政府主義，一為社會無政府主義。而吾等則以無政府主義當以平等為歸……」[38] と書かれるように、劉師培は人類が平等、独立、自由の三大権利を持つとし、独立、自由の権利は個人的な意志で実現できるが、全人類の幸福を達するために必ず平等の権利を頼らなければならないとした。また、「獨立權者，所以維持平等權者。惟過用其自由之權，則與他人之自由生衝突，與人類平等之旨或相背馳，故慾維持人類平等權，寧限制個人之自由權」とし、これは「天義派」アナキストの「立說之本旨」だと述べた。作者は無政府革命により人類は国界を打破し、政府を滅除する日を迎えることを信じた。

また、日本の無政府主義者と区別すると、「無政府主義雖為吾等所確認，然與個人無政府主義不同，於共產，社會二主義，均有所採。彼等所言無政府，在於恢復人類完全之自由；而吾人之言無政府，則兼重實行人類完全之平等。蓋人人均平等，則人人均自由」[39] と述べられるように、幸徳秋水、堺利彦、山川均と大杉栄を代表とする「直接行動派」は「自由社会主義」と自称することに対して、「天義派」アナキストは「平等無政府主義」と自称する。

「幸徳秋水來函」[40] で、幸徳秋水は何震が「女子宣布書」で「初婚の女性は必ず初婚の男性と結婚し、再婚すると両方は必ず再婚する男女」と主張することに対し、婚姻や恋愛の自由は男女交際に一番重要な条件だと反駁した。それの回答として「震得書後，即往訪幸德君……蓋幸德君及堺君之意，在於實行人類完全之自由，而震意則在實行人類完全之平等。立說之點，稍有不同……」と書き、ここからも「天義派」と日本社会党「強硬派」の無政府学説の分岐がわかり、すなわち「平等」と「自由」を巡る各自の取捨はそれぞれだと言えよう。

「天義派」アナキストが自ら創出した平等的無政府主義理論を代表できる集大成は劉師培の「人類均力說」[41] である。劉師培は搾取なき平等な社会を建築するために、独立の個人、または

38）申叔「無政府主義之平等観」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、93-109頁。

39）同上。

40）「首冊讀畢，拍案呼快。就中《女子宣布書》，議論雄大，如名將行兵，旗鼓堂堂不可當……但是僕意猶有憾者，則以僕所持者，有一二異見，可容僕之直言乎？……貴孃所言，以為初婚之女，必嫁初婚之男；再婚之婦，必嫁再婚之夫。是誠僕之所不解也。夫夫婦關係之第一要件，在於男女相戀相愛之情。縱令初婚之夫婦，心中無相戀相愛之情，則固有妨與夫婦之道。又令再婚之男與初婚之女，真克愛戀和諧，何害其為夫婦乎？ 而貴孃必欲使初婚之男女、再婚之男女相互配合，能無仍為古來“真女不見二夫”之陋道德所染乎？僕竊疑之。既以愛情為男女交際之要件，既可不必問其法律上所許否……僕今臥病褥，艱與只比，尚幸貴孃枉駕茅屋。又，友人堺利彦，平生頗討究女權問題。貴孃若來，僕亦欲之共論也……」、「幸德秋水來函」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、347、348頁。

41）「人類均力說」、萬仕國・劉禾校注『天義・衡報』、中国人民大学出版社、2016年、86-93頁。

個人の独立が養われなければならない。すると劉師培は独立個人の社会分業、財産分配について大胆な提案を設け、「人類均力説」を創出した。「夫均力主義者，即以一人而兼眾藝之謂也。欲行此法，必破壞固有之社會，破除國界，凡人口達千人以上，則區劃為鄉。每鄉之中，均設老友棲息所。人民自出生以後，無論男女，均入棲息所；老者年逾五十，亦如棲息所，以養育稚子為職務。幼者年及六齢，則老者授以文字（世界語）……五年而畢。由十齢至於廿齢，則從事實學。此十年中，半日習普通科學（地理・歴史・數學・理科・畫圖・音樂），半日習制造器械，即民生日用必需之物也……故年逾二十，即可出而做工」、続いて二十一歳から三十六歳の社会分業を設定し、この方法に従うと「處於社會，則人人為平等之人；離於社會，則人人為獨立之人」となり、平等で、共産主義の理想の社会を構想したである。

おわりに

19世紀末に西学東漸の波と共にアナキズムは西欧、ロシア、日本、中国という道筋に従い中国に吹き込まれてきた。最初に中国人はアナキズムの認識が不完全で、アナキズムとニヒリストの概念を混同し、区別しない場合が多かった。このような状況は『天義報』の出版まで続いた。『天義報』には大量の日本書籍の中国語訳が載せられ、『大阪平民新聞』と「社会主義金曜講演会」から各国のアナキズム、社会党の革命事情を把握することができ、日本社会党強硬派アナキズムの影響により、「天義派」アナキストはクロポトキンの共産的無政府主義に傾斜した。また、『天義報』の編集者はアナキズムを受け入れる際に、自国の情況を踏まえてアナキズムを中国的に解釈した。女子解放と無政府主義を両方とも宣伝する「天義派」は、ヨーロッパ、日本のアナキズムと比べて「平等的無政府主義」と自称した。アナキズムをより受け入れられるように、「天義派」同人はアナキズムを中国古典と融合して中国伝統学説、古代政治から無政府主義の合理性を説明した。このように『天義報』における知識の生成、伝播、接触および受容は、無政府主義、ひいては社会主義の中国への伝播に理論的な基礎を築いた。アナキズムの東西交渉の過程は「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という西学東漸の道筋を妥当に解釈できるだろう。